
regret

聖斗

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

r e g r e t

【Nコード】

N 3 7 0 6 N

【作者名】

聖斗

【あらすじ】

あの日から、彼女の瞳は彼を、映さなくなった。過去の思い出と過ちに、いつまでもしがみつく探偵。残るのは、たった一つの後悔だけ

高校生コ哀。

00. プロローグ

今のアイツにとって、俺はどういう存在なのだろう。

ただの友達？
それとも幼馴染？

少なくとも今のアイツの瞳^めに、俺は映ってない。

映ってるのは、俺の知らない、誰か。
それでも今でも、

アイツが一番知ってるのは俺なんだと。
だから余計、
腹が立って、
腹が立って。

後悔だけが残って。

アイツの瞳^めは、その何も知らない誰かを、映してる。
なあ、教えてくれよ。

あの時俺が、お前の気持ちを受け取っていれば、

お前の瞳^めは俺を映していたのかを。

00. プロローグ（後書き）

とりあえずプロローグだけアップ。

ストーリーの展開上、オリキャラも登場します。

その他、今までの小説ではありえない（かもしれない）設定も飛び出す可能性もあります。

許せる方のみ見てやってください。

頑張ってシリアスにする予定ですww

01・それはもう過去のこと

忘れもしない、あれは中学2年の冬。

「好きなの・・・あなたのことが」

初めて見る、表情^{かお}。

こんな時にまで冗談を言うような奴じゃない。

まさか、コイツが俺をそういう風に見ていたなんて。

「ゴメン、俺は――――お前をそういう対象に見れない」

それは本心だった。

その時は。

二度と工藤新一に戻れないということと蘭が結婚したという事実を、

まだ受け入れられない自分がいた。
受け入れる受け入れないは別として。
簡単にいえばまだ蘭のことを引きずっていた。

「そう―――ありがとう」

何十分、何時間にも感じた沈黙の後。
それは突然やってきた。
思い返せばこの瞬間から。

「え？」

「分かったたの。こうなること。でも、言わなかったらずっと引き
ずってたから―――
だから、諦めがついたわ」

笑ってるつもりなのだろうか。
頬が少し上がっていたが、明らかにアイツは泣いていた。
その少し微笑んだ顔に不釣り合いな雫が頬を伝っていたことを、
アイツは気付いていたのだろうか。

アイツを憎んだわけでもなく、ただ時間ときは流れて。
解毒剤は完成した。
しかし、戻れなかった。

俺の体には、耐性ができてしまっていた。

体中の水分が無くなるんじゃないかと言っくらい、アイツは泣いて俺に謝ってきた。

許したわけでもなく、でも許さなかったからと言ってどうなるわけでもなく。

それでもどこか俺たちには見えない壁ができてしまったようで。

相変わらずの付かず離れずの関係を続けながらも、

明らかに俺たちは『離れ』ていた。

あの時だって、三か月ぶりくらいに話しかけられたと思ったら、

それは突然の告白で。

気付いた時には、もう遅い――

それは遠い過去の、一コマに過ぎないのだから。

「誰なんでしょうねー灰原さんの好きな人」

そう言って考え込む少年―― 円谷光彦

「コナン君じゃないとしたら・・・誰だろう」

ただでさえ大きい目を一層大きくさせて考える少女―― 吉田歩美

「以外だよなー灰原の奴コナン以外眼中に無いと思ってたけど」

昼の弁当をまだモグモグさせてる少年―― 小嶋元太
他に話す話題は無いのかと言えば最初こそは駅前のケーキ屋がどうだの依頼があだの言ってるが、
そのケーキ屋で彼女を見かけたと誰かが言えば『そう言えば灰原さんの好きな人って――』と話しの流れが変わり。

結局のところ今コイツらの頭にはそのことしか頭に無いようだ。

「コナン君！気にならないの？」

「ああ？別に――」

気になるよ？

まさかアイツが自分より10以上下の奴に恋をするとは。
いやでもそれは別として。

本当は――

どうして、自分じゃないのかって。

そんなただの我儘に過ぎないのかもしれない、けれど。

やっぱり心の中じゃ少しの期待を抱いて。

巡り巡って、もうすぐあれから4年――

今、アイツの瞳^めに映ってる奴は、誰なのだろう――

01・それはもう過去のこと（後書き）

プロローグだけでお気に入り登録をしてくださった方、本当にありがとうございます。

情景描写とかそういうのは本当苦手です、ダメだし感想受け付けません。

そもそもこの小説自体長いブランクを経てようやく目の目を見た作品です。構想自体は「I don't know the truth」より以前に出来上がっていて、ただ複雑な設定上、なかなか掲載することができなかった作品です。

そう言えば、哀ちゃん（江戸川氏）一筋だけど、もし哀ちゃんが心変わりしたら？そんな飛んだ妄想から生まれた作品でありますええ。

次回以降もよろしくです。

02・それでもそこに 愛はなくて

あ、弁当箱が変わってる

どうしようもないことでさえ嬉しく思える俺は、きっと重症だ。

「灰原あ、これ……」

細く白い腕が大きな机を掴んでいる。

視線を上へ移せば、見慣れた、いや、そう言っでは少し失礼かもしれない。

いつもの、美しい端正な顔。

「ああ、それ。あなたこの間落としたかなんかで角割れてたの。だから新しいのにしたんだけど……」

気に障ったら前の割れた弁当箱に戻すけど？」

そうやって首をこてんと傾けるしぐさに、

そんな中身が溢れるかもしれない割れた弁当箱がいいという物好きがどこにいるのだ、と以前はなんとも思わず突っ込んだだろう。

しかし今は。

どこか胸の奥で何かが歩いてるような音がするのは気のせいじゃない。

いつからだろう。

「あ、いや……換えてくれたなら……」

入れ物が変わっても中身は同じだし。

彼女らしいと言えば彼女らしい。

「・・・でもやっぱりコナン君じゃないんでしょう？」

何をイライラしてるのか、腰に手をあて上を見上げて考える歩美。
トレードマークだったカチューシャは高校に入ってやめた。

以前はどちらかと言うと『可愛い』タイプだったが、最近、という
より高校に入った途端、

『綺麗』になつてきている。

「まったくですよ。好きでもないのにコナン君にお弁当毎日作つて
るんでしょう、灰原さん」

生徒会役員がここで何という議論をしているのか、と突っ込みを入
れたくなるが、まあ置いておいて。

来年の生徒会長候補、光彦が鋭い目で、若干妬みの入った目で俺を
見る。

「いいよなあ、コナンの飯うまそうだしなあ」

そんなもの弁当箱に入ってたか、いや、コイツのことだから誰かか
ら貰ったか奪ったか。

見慣れないパンをかじりかじり議論に参加する元太。

この三人は・・・まあ、半ば強引に引き込まれる俺を含めた四人は、
休み時間になる度にこうして議論を交わす。

それが果たして有意義な議論かどうかは置いておいて。

「哀ちゃんはさあ、ずっとコナン君好きだと思ってたんだけどね、」

あながち事実と違っては無い意見を、歩美が述べれば。

「昔はコナン君好きだったけど、愛想を尽かしたとか。結構身勝手なところありますからねえ、コナン君」

突っ込みどころ満載のこと言ってくれるじゃねーか、と言いたいくるをグツと抑え、

あながちそれも間違いじゃないなと感心してしまう自分も居る。

「コナン、オメー何か灰原に嫌われるようなこと言ったんじゃねーか？飯がうまくねえとか、なんとか」

俺は昭和の頑固オヤジじゃねーよ。

大体アイツに今好きなやつが居ると分かったのはつい最近のことだ。歩美恒例の『女の勘』ではアイツが最近なお綺麗になって、それはきつと女の子は恋をすると綺麗になるから、アイツもきつと恋をしているのだと。

んで歩美は恋ならきつと俺にしてるに違いないと、いつか聞いたらしく。

その反応は一言『そんなわけないじゃない』。

そのあと続いた言葉が『でも好きな人が居るのは事実だわ』だったらしい。

以来、この三人はアイツの心を虜にしているやつを探すために必死というわけで。

しかしやはりこの三人には言うべきだろうか。
アイツを一度フツたことを。

なんだかんだ言うタイミングを逃し、アイツもそういうことを言うタイプじゃないから結局そのことは
この三人は知らない。

灰原が俺に告白してきたことも。
俺が灰原を一度フツたことも。

やっぱり俺は灰原が好きなんだなあ、と自覚したのは半年前。
改めて自分はそういう系統のことに關しては脳がかなり簡素な造り
になっていることを思い知った。
授業中何かしら隣のアイツが気になったり。

一緒に帰るだけでただでさえ熱い体がなお熱くなったり。
それを『恋』といわず何を『恋』と言うのか。
そんな想いはあつという間に歩美に見抜かれ、
今では完全に俺の片想いとなっている。

しかし、あれから4年経って、俺の瞳めにようやくアイツが映り始めたところで、当のアイツの瞳めには、俺はもう映ってない。

「灰原あ、帰ろうぜ」

「ああ、江戸川君」

なんだお前か、みたいな薄い反応はスルーして。
振り返ったコイツの胸元は暑いから微妙にはだけていて・・・
やばい、俺は本当に重症かもしれない。

「なあ、灰原、晩飯何？」

歩き始めた第一声がそれかよ、みたいな突っ込みがありそうかもしれないが。
下らないことでも会話を交わしたくなるのはまあ、その、なんだ。
好きだから・・・みたいな。

「何も買ってないのよ。この前買ってきたレーズンパンの残りがあ
るけど・・・」

「灰原サーン、ちょっと待とうか」

コイツの冗談はシャレにならない。

本当にやりかねないからこそ、ここはしっかりと拒否をして。

「冗談よ」

そう言つて俺に微笑む彼女がこんなにも愛しいのに、触れること
できない、辛さ、もどかしさ。

俺を見つめる瞳も、今は違う誰かを映してる

やっぱりあの時に。

なんてそれは後の祭り。

「じゃあね、また夜」

そう言つて隣家の門に消える彼女を、ただ見ているだけで、こんな
にも辛い。

ああ、自分はいつから。

こんなにも。

02・それでもそこに 愛はなくて（後書き）

どーもほのぼの感が・・・

頑張ってシリアスにしたいんですけどねえ。

次回以降もよろしくです。

03 過去の事実は 今へ繋がり

ぱちーん、ぱちーん。

驚いて振り返れば、火花を散らして何を機械で削ってる博士の姿。見慣れた、と言えばそれまでだが、最近はマシな発明品を作っている。完成は楽しみにできる。

まあ、60を過ぎてマトモなものを作れないでどうする、といったところだが。

『私はあなたしかあり得ない！』

いきなり大音量でそんな言葉が耳に入る。

視線を移せば、まあ、なんだ。

ありきたりな恋愛映画の再放送ってやつで。

それを向かいのソファに座るアイツは無表情で見てて。

「そんなことってあるのかしらね、」

え——と間抜けな声を俺が発せばクスクスと笑う灰原。それすらも可愛いと思ってしまう俺はきつと。

「あなたしかあり得ない、なんてね——あ、でも」

「あなたは蘭さんしかあり得ないのよね——」

いやそれはきつと間違い。

蘭一筋だった俺が、お前をこんなにも好きになるなんて。
今の俺はお前しかあり得ない——

「ゴメンねえ、新^{しん}の面倒見てもらっちゃって」

そう言つて微笑むかつての幼馴染は、髪をバッサリと短くしたこと以外、あの頃と変わってない。

「ううん、いいよ。新君おとなしいし」

『桃太郎』といかにも絵本、というフォント背景画の本を抱える小さな男の子。

三年前に誕生した蘭の息子。

俺との共通点のない端正な顔立ちはきつと蘭の旦那さんに似たからで。

名前が新^{しん}というのは、まだ俺のことを引きずってたから。

『バカだよな、私。子供にまで．．．』と涙ぐんで呟いていたかつての映像が、頭の中で再生される。

いや、でもそれ以上に鮮明に映し出される映像は

『無理なの。ごめんなさい』

ベッドの掛け布団に突っ伏して泣くアイツの姿。

それは――俺が江戸川コナンとして中学2年の秋口のこと。

蘭が結婚した――

それが果たして俺の中でどれくらいの出来事だったのかは、よく覚えていない。

ただ不思議なことにショックと言うほどでは無かった気がする。

いや、気持ちの整理ができてなかったからなのかもしれない。

でも披露宴で蘭の隣の新郎に自分のかつての姿を重ねてみたり、そ

れでもどうにもならない現実には耐え切れず、

宴の最中会場を抜け出し工藤新一に近づきつつあった自分の顔をトイレの鏡に映して、一人叫んだことだけ覚えている。

シヨックとは少し違うような。

嘆き悲しんだところでどうなると言っただ。

純白のドレスに身を包む蘭の姿だけは、今でも昨日のことのように

『私は行けないの、蘭さんに謝っておいて』

披露宴の当日になって半狂乱で泣きはらした彼女に、博士はただおろろろするばかりで。

事情を知らない探偵団三人は顔を見合せながら博士のビートルの中から心配そうに家の中を覗いてた。

『おい、どうしたんだよ。灰原』

驚いて走って地下室に入れば。

彼女はまだ寝巻のまま。

細い肩が小刻みに震えてた。

『私は行かないから・・・私のことは気にしないで早く行きなさい』

彼女なりの強がりだったのか、それでも消えてしまいそうな涙声で呟くように言った。

『なんだよ、祝ってやろうとかそついう気持ちは・・・』

俺がそう言って灰原に近づけば。

アイツはバツと顔を上げた。

頬が涙で濡れている。

あの時と――同じ顔。

もう元に戻れないと俺に告げた、あの時と。

『無理なの！・・・ごめんなさい・・・』

結局、アイツは披露宴に行くことはなかった。

後で最後に撮影した記念写真を博士に渡したが、アイツが見たかどうかは知らない。

「哀ちゃんてさ、最近綺麗になったよね」

やっぱり女には分かるんだろうか。

「え？」

「やっぱり哀ちゃんもお年頃ね。相手は・・・」

そうやって新君を抱いたまま顔を俺に近づけてくる蘭。

「コナン君かなあ？」

——そうだったらどんなにいいことか。

「違うよ」

え、と小さい声が蘭の小さい口から漏れる。

「そうなの？ずっと哀ちゃんのコナン君のこと好きなんだと思ってただけ」

それはもう、『好きだった』という過去形。

あの日あの中からすべて変わった。

例えば、そんなことで。

俺とアイツの間にある壁は、消せない過去の事実。

03・過去の事実は 今へ繋がり（後書き）

蘭ちゃんの子の名前をずっと何にしようか悩んでたんですけど、うーん。

新、というのはちょっとベタでしたかね。

蘭ちゃんが出産当時でもまだ工藤氏のことを引きずってた、というのを表したかったんですが。

うーん、以外に長くなりそうな予感。

04・瞳に映る彼は

「後悔先に立たずだぜ、探偵」

珍しく真剣な声でかつての工藤新一とほとんど同じ顔のコイツは言
った。

「なーんてね」

かと思えばいきなり灰原アイツの声を真似してきたり。
まったく。

大体何だ、人の家いきなり上がりこんでソファにふんぞり返って
なんという人間だ、と思ったが自分も隣家で同じことをしてと思
うと情けなかったり。

「俺もさあ、悔しいけど哀ちゃんはお前のことずっと好きだったん
だと思ったんだけど」

会ったび会ったび他人にそう言われると、『今は違う』とはっきり
否定されてるようで。

無性に胸が締め付けられる。

「でもやっぱフツたのはお前だし仕方ないよ」

「おい！なんでお前がそのこと知ってんだよ？」

あのことは俺と灰原しか知らないはず。

「探偵もずいぶん落ちぶれたなあ。俺が空から見たたの哀ちゃんを知ってると思うよ」

「・・・うてか、お前キッドはとうの昔にやめたんじゃないの
かよ？」

「キッドはね。キッドやめたら空飛んじやいけねえのか？」

まあ、そりゃそうだが。

「どうする？ 哀ちゃんの好きな人、俺だったら」

そんなこと . . .

いや、あり得る、というよりまだそれが誰なのかも分かってないから一応こいつも捜査線上に上げる。

でも灰原の好きな奴がコイツだったら俺は死んでしまう気がする。

「お前も歳とつたなあ」

なんか胸の奥底で沸々と湧き上がる怒りの矛先を、話題を変えてコイツに向ける。

「え？」

「白髮」

「ええええええええ！！！」

慌てて頭を押さえて洗面所に走っていきやがった。

まあ、悔しいことに嘘。

27にもなつて10年前と大して変わらない風貌とはこれまた憎らしい。

ああ、でも俺も元に戻ってたらあんな風に・・・

なんてたまに考えてしまう自分がどんなに酷いのかは分かっている。元に戻って何も知らぬまま、アイツに恋心を抱かぬまま、

蘭の元に戻れば・・・

それでも、不思議なことにその気持ちはいつしか俺の中から消え去って行つた。

『元に戻れない』という事実を知ってから数年は、頭に浮かぶのは蘭の姿だつた。

しかしあの日以来。

蘭の結婚式へ出席するのを頑なに拒んだアイツを見たあの日以来。

俺の心を支配する人間は変わっていた。

それに気づいたのが半年前だから、自分は本当にそいつのに疎いと思う。

「・・・つたく。でもさ、」

数分後に怒りに狂つた表情で戻ってきたアイツは、俺に飛びかかってきたが、

苦笑いしながら必死に謝つたらなんとか許してくれたので、いい奴だなあ、と都合よく置き換える。

「哀ちゃんはまだ、お前のこと好きなんだと思うよ」

「え？」

そんなわけないだろ、と言おうとしたが何故か口が動かない。
きっと心の中では諦めの気持ちと、もしかしたらという期待の気持ち
が同居しているのかもしれない。

「じゃな」

「お、おい！」

アイツは家を出た。

正確には窓から『飛んで行った』

本当、何をしに来たというのだ。

いい加減、この気持ちにケリを付けなければ。

俺は、灰原が好きで、好きで、好きで。

それでも、灰原はもう――

「ねえねえ！ビッグニュース！ビッグニュース！」

翌朝、教室に入ると、歩美の机の周りに元太、光彦が腕を組んで集まっていた。

光彦はこれはどうしたことが目を閉じて何か考えている。

歩美が俺を確認すると、大きな声で俺を手招きして呼んだ。

「なんだよ、朝っぱらから」

「大変です、コナン君。大ニュースも大ニュースです」

「コナン、ちゃんと聞くんだぞ」

元太が俺の肩をポンと掴んで、真剣な表情で言う。

何がどうしたというのだ。

「あのね、哀ちゃんの好きな人、分かっちゃったの」

「――」

歩美はその朝、委員会の仕事があったため、普段より20分程早く学校に登校したという。

この学校は昇降口に行くには校庭を突っ切るか、はたまた校庭に沿って大回りしなくてはいけない。

朝、校庭では野球部とサッカー部が朝練をしていたので、歩美は後者を選んで昇降口を目指した。

その時。

「哀ちゃん？」

校庭のスタンドに腰掛ける、見慣れた美人の灰原しんげうの姿を確認した。

いつもなら哀は始業時間ギリギリに来るのだが、しかし哀は委員会などにも入っていない。

サッカー部のマネージャーでも始めたのか。

歩美は一声かけようと、スタンドを目指して走った。

「あら、歩美ちゃん」

「どうしたの？哀ちゃん」

夏休みも間近と言う7月。

心地よいなんてものもなく騒音ともいえる蝉の声が響く中、哀は静かにコンクリートのスタンドに腰掛けていた。

歩美も哀の隣に座る。

日焼けとは程遠い白く透き通った哀の腕を視界に入れて、歩美は聞いた。

「何してるの？こんなところで」

「・・・さあ、何してるのかしら」

歩美は少し不審に思った。

今まで10年間、哀とは互いに名前を呼び合う仲だった。

だから歩美は哀のことは一番、とはコナンが居るので言えないが、それでもかなり自分は哀を知っている、

理解していると自負していた。

こついう時だつて、口には出さないがコナンがサッカーをしているから、とか、

目的は不明でも草木を見てたとか、空を見てたとか。

行動に無駄のない哀には何かしらそれに理由があった。

理由もなく佇んでいることなどは、少なくとも今まで見てきた哀では初めてだった。

そう、思っていたが。

『ほらー！そっち行つたぞ！』

校庭で練習試合をしているサッカー部員。

大きな声を出したのは、確か2年の副キャプテン。

隣のクラスに在籍する男子。

活動的でルックスも良く、その上温厚な性格で女子にもなかなか人氣があつて

そつえば彼も哀のことが好きだと噂を聞いたことがある。

確か名前は

と思つた時。

覚醒した。

彼女の瞳は明らかに彼を追っている。

観察眼に鋭い彼女だから、もしかしたらサッカーの上手い彼を単に見ているだけかもしれない。

でも、それくらいは歩美にも分かる。

伊達に10年来親友をしてない。

その瞳は明らかに――

彼を、映していた。

「好きなの？ × × 君のこと」――

すると、哀は静かに歩美を見て言った。

「好きかもしれないわ、彼のこと」

04・瞳に映る彼は（後書き）

久々に小説ページ覗いたらお気に入り登録増えていたのでビックリしました！

ありがとうございます、本当にもう。

こんな駄文を読んでもいただき。

それだけでお腹いっぱいです（えええ）

感想などもバンバン書いちゃってください。

ああ、駄文なのは知ってますのではない。

とうとう哀ちゃんの好きなお方、次回出しちゃいます。

オリキャラっつーのはいいですよねwww

最終的にはコ哀なのでご心配なく。

次回以降もよろしくです。

05・罪に罪を重ねて（前書き）

ご無沙汰してます（殴

05・罪に罪を重ねて

「まあ、二人の問題だからさ、俺が割り込む話じゃないけど」

かつての白い衣装に、特徴のあるシルクハットとモノクルを外してあぐらをかいている彼の姿は何故かものすごくおかしくて。見た目と釣り合わない爆弾発言に、私は待ったをかける。

「今更彼に取り入ろうなんて思っていないわ」

「いや、そうじゃなくて、」

誰も何も分かってないのね。仕方ないとしても。

「まだ彼の中には蘭さんがいるわ」

「それ、それなんだよ」

大げさにパチンと手を叩き、私を指さす、彼。

「哀ちゃんはさあ、ちょっとアイツのことバカにしすぎだよ」

どういっ、って。

「アイツはあんなだけどさ、実際は賢い探偵だよ？10年前の――
あ、待てよ」

『10年前に別れた彼女を引きずるわけがない』とでもいいかったのだろっけど。
現に彼は引きずっていた。
きつと今も、ね。

「普通さあ、本当にあの蘭ちゃんを引きずってたら普段ああやって笑顔で会うことって難しくない？」

ああ、そういえば。
でも。

裏を返せば彼なりに吹っ切れたのかもしれない。

ああ、ダメ。悪循環。

こうして無意識のうちに私は過去の罪を消し去ろうとしている。

誓ったはずでしょう、あの日に。

解毒剤を服用しても成功しない、と判断したあの日。

そして、

彼に告白したあの日。

二回も誓ったじゃない。

彼にとって私は恨み憎しみの対象でしかないって。

だから彼が私の死を望むなら、私は有無を言わずそれを受け入れる
って。

まだ、生きてることが不思議なくらい。

でも、私はまた

罪を重ねようとしてるのかも、しれない。

「でも、」

いい加減帰ってほしいとは言わないけど、
まだ居たの、みたいな。

「俺は哀ちゃんが幸せになるの願ってるからさ、」

その願いが無駄なこと、どんなに酷いことか、
分かってそんなこと言ってるんだろうか。
かつての”彼”そっくりの”彼”は。

「結局でも哀ちゃん一番よく知ってるのはアイツなんだよなー。悔しいけど」

何がそんなに悔しいのかよく分からないけど。

「哀ちゃんはさ、その・・・なんだっけ、××君。好きなんですよ。」

「なっ・・・。」

いきなり言っただけいいことと悪いことがあるじゃない。

「本当にそれでいいの、」

いいとは思ってない。

私が幸せになることは、決して許されないのだから。かと言って今更私が幸せになれるはずもないけど。

「どういこと?。」

と、私が行ったら彼はいきなりアハハと笑いだす。

「な、何がそんなにおかしいのよっ」

「哀ちゃんも鈍感だね」

ちよつと、心外。

何を言ってるのか分からないのは、当たってるけど。

「そのうち、気付くよ哀ちゃんも————アイツの気持ちに——」

この人の意味不明さは奇妙だった。

05・罪に罪を重ねて（後書き）

今作初めての哀ちゃん目線です、どうでしたかね？
黒羽君のキャラ崩壊はいつものこと。

06・親友だから、

ふと、昔のことを思い出した。

私たちがまだ、小学3年生だったとき。

恋だのなんだの言いつつ、それはまだ子供じみた可愛らしいものだったけど。

コナン君と、蘭お姉さんは違った。

まるで、昔から知っているかのような。

最初はただコナン君が一方的に蘭お姉さんのことが好きなのだと思うってた。

だけど、それは違ったのかもしれない。

蘭お姉さんも、コナン君が好きだった？

いつだったか、コナン君は蘭さんの想いの人だった、
新一お兄さんにそっくりなのだと、聞いたことがある。

だからなのか、でも親戚らしいから、似てるのは当たり前だし、
第一似てるだけで好きになる？

恥ずかしい話だけど、一時期、蘭さんにやきもちを妬いたことがあ
った。

そんな時、またその光景を大人びた目で悲しげに見つめていたのが
哀ちゃんだった。

一回、聞いたことがある。

「哀ちゃんは悔しくないの？」と。

今思えばバカげた質問だった。

でも、私の『女の勘』では絶対哀ちゃんもコナン君が好きだった。
だから聞いたのに、返ってきた答えは

「別に」だけだった。

そして、その後呟くように哀ちゃんが付け加えた言葉を、私は今で
も覚えてる。

『勝てるわけないでしょう、彼女に』

幼すぎて、意味がわからなかった。

でも、それは今となっても、分らない。

コナン君や哀ちゃんに出逢った、あの頃の蘭さんと同じ年、
17になった今でも。

その後、コナン君と哀ちゃんが事件に巻き込まれて数カ月、けがで入院していた時期があった。

なんでも、かなり大きくて重大な事件だったらしく、コナン君は軽傷だったから2週間くらいで学校に来たけど、

哀ちゃんはお腹を銃で撃たれたとかで3か月は入院してたし、退院

して1か月は歩けなかった。
そのころからだと思う。

「ケンカするほど仲がいい」にぴったり当てはまっていたコナン君と
哀ちゃんの距離が、離れていったのは。

そのうちに、4年生になって私たち5人はクラスも離れて、話すこ
とも無くなって。

正直、その時期はコナン君はどうでもよかった。

哀ちゃんを遠くに感じる方が辛かった。

哀ちゃんは、私が話しかけたら笑顔で応えてくれたけど、目は明ら
かに笑ってなかった。
何も映して無かった。

ぞっとするほど、昔の澄んだ瞳の面影は、無くなってた。

中学に入学して、私と哀ちゃん以外はみんなクラスが別れた。哀ちゃんは入院してた直後より心から笑うことが増えたし、元から何か人を惹きつけるものを持つてる哀ちゃんに、何の心配もなかった。

実際は、それは私の思い違いだったけど。

コナン君がどこか塞ぎこんだ感じになったのは、中学生になってからだった。

多分、蘭さんの結婚の話がもうこの時点であつたらしいから、そのせいだと思うけど。

ただそれでもいつしか私の中の優先順位は哀ちゃんになってたから、週に一回は通つてもいない塾を口実に、部活を休んで哀ちゃんと一緒に帰った。

テスト前には一緒に勉強して、休みの日には一緒に駅前のケーキ屋に行ったり、ショッピングセンターに行ったり。

いつしか、私はコナン君のことを気にとめることが無くなっていった。

それくらい、哀ちゃんと一緒に居て楽しかったから。

だけど、それは続かなかった。

中学2年の秋、蘭お姉さんが結婚した。

素直に喜べる自分が居た。

お世話になった優しいお姉さんの幸せへの喜び、同時に、心の隅で心配だった、コナン君を取られる心配が無くなったことに、心の底から喜んだけど、コナン君、哀ちゃんはずうでもなかった。

私が後にも先にも哀ちゃんのおんなに激しく泣く姿を見たのは、あの時だけ。

披露宴の日の朝、哀ちゃんが「行きたくない」と大声で泣いていた。大声、というよりかは、静かに泣いてたけど、コナン君になだめられてた時の、鬼気迫る顔は、私は正直哀ちゃんを初めて怖いと思った。

そのうち、コナン君は諦めて哀ちゃんは家で留守番になった。

目の前で蘭お姉さんのきれいなウエディングドレス姿を見ても、私は素直に喜ばなくなってた。

その原因を作った？ 蘭お姉さんとコナン君がちよっぴり嫌いになった。

哀ちゃんを泣かせた。

それくらい、哀ちゃんは大事な親友だから。

二人は気付いてないけど、私はこっそり聞いてしまった。

哀ちゃんがコナン君に告白したところを。

中学2年の冬だったと思う。

正直、私はこのまま二人が上手くいってほしい、と思わなかった。

私がコナン君が好きだから、というわけじゃなくて。

私はそのころすでに光彦君に惹かれつつあったし。

それに、哀ちゃんを泣かせるような男に、哀ちゃんは任せられない。そう思った、ただ純粹に。

結果は私の望むとおりだったけど、やっぱり哀ちゃんは泣いてしまった。

自分勝手だけど、哀ちゃんを振ったコナン君にもまた、腹が立った。

このころは、何をやっても、コナン君のことが気に食わなかったから、かもしれない。

そのまま出て行ってコナン君をひっぱたいてやろうかと思った。
でも、やめた。

哀ちゃんと言った。

「諦めがついた」と。

そうだ。

哀ちゃんは、コナン君をきっぱり忘れて、楽しく笑って生きるべき
だと。

これで、哀ちゃんの笑顔が戻る。

次の日、学校に行くといつもより晴れ晴れとした哀ちゃんの姿があ
った。

「おはよう、哀ちゃん」

「あら、おはよう」

蘭お姉さんの披露宴の後塞ぎこんでた哀ちゃんは、ろくに口を聞け
るような状態じゃなかったから、久々に交わす会話が、とてつみな
く嬉しかった。

ねえ、駅前にお洒落な喫茶店見つけた、帰り寄って行かない？

——いいわよ、久々だものね

哀ちゃん、この問題の式の作り方教えて
？いい加減覚えた方がいいわよ
はーい・・・またなの

夢のように楽しい時間は、周りが中学3年になって付き合う人がぼちぼち出始めても、恋に向かないくらい、私は哀ちゃんと一緒に居る時間が楽しかった。

高校に入り、今年になってやっと哀ちゃんにも春が来たと思って、応援しようと思ったのに。

いまさら「好き」だなんて言い出したコナン君を、私は少し自分勝手だと思う。

でも、私は、哀ちゃんの味方だから。

哀ちゃんが××君を選ぶなら、それでいいし、コナン君を選んだって、私は応援したい。

06・親友だから、（後書き）

歩美ちゃん視点。

ちよつと依存気味な感じですけども、そこは円谷氏への恋心でカバ
ー！。

なんだかんだいって、哀ちゃんの親友は歩美ちゃんしか当てはまら
ないと思います↑

前話から約3か月も間があいてしまい、申し訳ありませんでした。
また次回からもよろしく願っています。

07・近づきたい？離れたい？

好きか嫌いか、と聞かれれば、どちらかと言うと好きなのだと思う。実年齢10も下の少年が、好きと言えば好きなのかもしれない。復唱したらえらくゾツとしてしまった。

もう誰も巻きこまないって決めたでしょう？

誰かを好きになるとか、愛するとか、そんな資格が無いって、

分かってるはずでしょう？

私は以前ほど、一人で生きていけるなんて思っていない。

でも、誰かにすがって生きていこうとも思わないのだから。

でもそういうときに限って、昔彼に幾度も助けられた時の言葉が走馬灯のように脳裏を巡る。

お願いだから、これ以上私に関わらないで。

ほら、彼に、愛されなくなるでしょう？

「ふーん、で？」

それだけ。

灰原が、いま誰が好きだろうと知ったこっちじゃない。

どっちにしろ、俺は蚊帳の外だからだ。

悔しい、そりゃあ、悔しい。

でも、全部仕方ないこと。

俺が悪い、それで済む話。

「何よ、コナン君。ちょっとは驚いたりすると思ったのに」

「アイツが誰のこと好きだろうと俺には関係ねえし」

「あーあー、またまたコナン君、硬派気取っちゃって」

「ホントは気になって仕方ないんだぜーっ」

コイツらに囃したてられると、なんだかそんな気もして。
俺は何がしたいだか。

「なあ、じゃあ聞いてみるよ」

「え？」

まん丸の六つの目が、一気にこちらに向く。

「その、倉木君とやらに」

強がってるんだと、思う。

絶対、コナン君は強がってるんだと思う。

だからって、何もこんなことしなくてもいいのに、と思ってしまう。

「ねえ、香織ちゃん、倉木君呼んで」

一応学年全クラスに顔がきく私が切り込み隊長となった。

部活が一緒の香織ちゃんはくるりと後ろを向いて、何やら机で男子数人と話しこんでいた『倉木君』を呼びに行った。

「えーっと、」

「倉木・・・充君^{みつる}・・・でいい？」

「そうだけど」

倉木君、とは話したことは無かったけど、とりあえずメリハリのあ
る明るいうリーダーのような子、だと聞いている。

確かに私が呼んだだけでクラス全員が一斉に私の方に振り向いた。

「あのね、短めに終わらせたいから単刀直入に聞くよ?」

「うん」

「倉木君は、B組の灰原哀ちゃんのこと、どう想ってる?」

「くどう、くん？」

目の前には見慣れた青色のブレザー、だけでもそもそも私の目の前にあるのは何故か。

頭には吐息がかかっている。

そして私は、背中の後ろで腕を組まれて、動けなくなってる。つまり、それは。

「悪い、灰原」

彼の言葉が、じんじんと頭に響いてくる。

ああ、そうか、私は彼に抱きしめられてる。

それがどういう意味なのか、私には分からない。完全に思考回路が遮断されてしまっている。

「あなた、自分が何してるか分かってる？」

「ああ、」

「好きだから、こっするよりほかに無かった」

次の瞬間、私は彼を出来る限りの力で突き飛ばして、気付いた時には一目散に彼から離れるように走っていた。

07・近づきたい？離れたい？（後書き）

倉木、充。

由来は、活動報告を普段読んでくださってる方は分かるかなあ、的な。

次回もよろしくです。

08・もう遅い

走り去っていく灰原の後姿を見ながら、まあ、当然の結末だろうな、と一人で納得した。

いまさら抱きしめたくらいで振りむいてくれるわけなんかない、なんて誰に言われなくても分かる。

でもほんの少しの賭けだった。

もしかしたらこの想いに気付いてくれるかもしれない、と。そんな賭け、最初から無駄だったのだ。

現に灰原は何も言わずに走り去って行ってしまった。

もしかしたら、今までの付かず離れずの関係が、崩れてしまったか

もしれない。
だから、そんな馬鹿げた期待など、さっさと捨ててしまえばよかったのに。

「哀、ちゃん？」

廊下の向こうから哀ちゃんが走って来たから、何事かと思ったら今までにないくらいの悲しげな泣き顔で、
でも哀ちゃんはそれを拭おうともせず、ものすごい速さで机の中の教科書とかノートをバックに収めて周りの視線も気にも留めず私の前に来ると、

「私帰るから。お願いだから余計なことしないで」

と、泣いてるのに、鬼のような形相で言われた。
ショックだった。

私に、怒ってる？
私の、せい？

「哀ちゃ
――」

言い終わる前にまた走って階段を駆け下りて行ってしまった。
哀ちゃんが去った後の教室は妙にしんとしていた。

クラスの人たちは、哀ちゃんが泣く姿なんて一度も見なかった。

そのうち、

『何があつたんだろーねー』

と面白おかしく言ってる人もいれば、

『哀ちゃんどうしたんだろう・・・』

と辛そうに呟く人も居た。

「もしかして・・・バレたんでしょうか、僕たちが倉木君に灰原さんのことを聞いたこと」

「マジかよ、でもよ、あれはコナンが聞いてみろって言ったんだぜ」

光彦君と、元太君の声も耳に入らなかった。

もし私が倉木君と話したことを怒ってるなら、

「謝らなきゃ」

崩れてしまう前に、失ってしまう前に。

謝らなきゃ。

そう思うと、居ても立っても居られなくて。

急がなきゃ。

急いで哀ちゃんに。

「ちょ、歩美ちゃん!？」

「私も帰るからっ! 光彦君、先生に言っておいてっ!」

「おい、歩美！」

ゴメンね、哀ちゃん。
私が、私が悪いの。

いつまでも突っ立ってても仕方ないから、教室に戻ると何故かざわついていた。
その中の光彦と元太は、俺の姿を見るなり、

「コナン君、ちょっと来てください」

「お前のせいだかな！」

と機関銃のように言い放ち、俺の腕を引っ張る。

「え、ちょ——ええええええっ!？」

ワケが分からず騒いでいるうちに、男子トイレの前に引つ張られる。

「コナン君、どうするんですか!灰原さん怒って帰っちゃいましたよっ!」

開口一番、光彦は鬼気迫る様子で言葉を発する。

「しかも泣いてたぞ、灰原」

元太の言葉で、何を言ってるのか分かった。

きつとさっきのことで、灰原は泣きながら早退したのだ。

どこまで俺は灰原を傷つける気だろう。

結局、俺はアイツのこと好きだと言っておきながら、アイツを悲しませることしかしてない。

「ああ、それはさっき——俺が」

「コナン君が倉木君に聞けば、って言ったせいで、歩美ちゃんまで傷ついてるじゃないですかっ!」

「え？」

「『え？』じゃねえよ、多分歩美が一人で暴走してるって灰原が勘違いしたんだよ」

なんだか話がだんだんすり替わってるような気がする。

「待てよ、聞くけどよ、灰原はなんで帰っちゃったんだ？」

「分かってないんですかっ!？」

「えっと、はい……」

「だーからー、お前が倉木君に灰原のことどう想ってるか、って聞けって言ったる？歩美の方が人脈広いから歩美に倉木君と話させたんだよな、そしたらどういわけか灰原がそれを知って、そんなもって——」

「ストロップ!！」

どっちにせよ、俺のせいなんだけど、ここはやっぱり本当のことを

言っておいた方がいいだろう。
とばかりを受けて歩美が可哀そすぎる。

「違うよ、実はさ——俺が」

下駄箱で靴を履くのももどかしく、きつとあの様子じゃ哀ちゃんはずっと家に帰ってるに違いない。
早く追いかけなきゃ。

追いつかなかつたら、家まで行っても謝らなきゃ。

許してくれるかわからないけど、私のせいで哀ちゃんが傷ついたのは事実。

早く、早く。

なんでもっと早く動いてくれないの、と自分の足に文句を言いたくなりつつ、全速力で昇降口から校門へ向かう。

校門を出て、大通りに出ると、まずは反対車線に渡らなきゃいけない。
でも信号は赤だ。

しかも交差点に救急車が止まってて、車の流れが悪い。
なんでこんな時にこんなところで事故なんかな。
と、迷惑極まりないことを思いながら、足踏みをしながら信号が青になるのを待つ。

ふと、タンカーで救急車に運ばれてる人が目に入る。

血まみれで、人工呼吸器をつけてる人。

救急隊員の隙間から、見えた姿に、私は驚愕した。

「哀、ちゃん――？」

音が消えた。

だって、血まみれで、担架に乗せられてるのは明らかに、

「哀ちゃん、」

ふと左側を見ると思い切りバンパーがへこんだ、ハザードランプを付けた車が止まっている。

取れなかったバンパーには血がべったりついていた。

何も聞こえない耳に、早くなる鼓動の音だけが響く。

忘れられたように転がる哀ちゃんのカバンは、金具が外れてた。黒い革張りが剥がれてて。

「どうして、」

人命救助の現場に割り込むなんて、なんて非常識なんだろうと昔ド
ラムを見て思っていたこと。

でも、その気持ちが今分かった気がする。

自分より当然大きくがっしりした若い救急隊員を割ってみると、そ
こには目を固く閉じた、

「哀——ちゃん」

嘘、嘘嘘嘘嘘嘘。

悪い夢なら覚めて。

「哀ちゃんっ！」

肩を持っただけなのに、哀ちゃんがたがた揺れてるのは、私が救
急隊員に引っ張られてるからだと思い付いた。

「離してよっ！」

人工呼吸器が一定のリズムで白く曇るのでまだ息をしてるとわかる
と安心したけど。

このまま、会えなくなったら？
会えなくなったら？

「お嬢さん、早くしないとこの女の子助かないからっ！」

救急隊員の叫ぶ声を聞いてハッと我に帰る。
私はサッと腕を引く。

「あの、私も乗って行ってもいいですか」

「え？」

「一緒に、病院まで、一緒に居てあげたいんです」

「でも、」

なんて我儘な小娘だろうか。

そんなことぐらい自分で分かっている。

でも、今だけは何をしても罰が当たらない気がした。

「お友達、なのかい？」

「大切な親友です」

親友、という言葉に何故か涙が溢れてくる。

「いいだろう、この女の子の家の人の連絡先知ってるかい？」

「私、分かります」

「いいだろう、さ、早く乗って」

声がとても勇ましくても、優しい笑みをこぼした中年の隊員は私の目を見てそう言々と私を早く乗るように促す。

私は道端にゴミのように転がってる哀ちゃんの形の崩れた通学かばんを急いで拾った。

ステップが上がって、すでに乗せられていた哀ちゃんの傍らに腰掛ける。

よく見ると腕が骨折したのかかなりはれ上がっていて、頭にも包帯がぐるぐる巻かれていた。

見てるだけで痛くて。

どんなに痛かっただろうと、想像したところでそれは想像でしかないのだけれど。

どうして、哀ちゃんがこんな目に？

どうして、どうして？

そのうち、救急車は静かに動き出した。

途中途中「緊急車両が通ります」とアナウンスしてるので、急いではいるのだからどうしてもっと早く走らせてくれないのか、運転手に文句を言いたくなってしまふ。

それくらい、哀ちゃんが消えてしまいそうなほど小さな息をしてた。もしかしたら、私のせいなのかもしれない？

気が動転した哀ちゃんが信号をよく見ないで渡ったから、轢かれたの？

だとしたら、私。

そうこうしてるうちに、病院に着いて、先にバックドアを開け哀ちゃんの乗った担架を運び出す。

まだ霞む視界を手で拭いながら、携帯を取り出して博士に電話をかける。

『もしもし、博士』

『おお、歩美くん、久しぶりじゃのう』

どうしてこんな時にこの老人はこうも能天気なのだろう。

事情を知らないから当たり前なのだけれど。

『あのね、米花総合病院に、急いで来て』

『——— どうしたんじゃ、急に？』

『哀ちゃんがね、大通りで車に轢かれたの』

『——— な、何じゃと！？』

『事情は後で、とにかく急いで来てね』

電話を切る間際、博士は何か言いかけていたがそのまま通話終了ボタンを押す。

ボタン、と携帯をたたみ、さっきまでの動転はどこへやら、自分でも動揺するほど落ち着いた足取りで私は手術室の前のベンチに腰掛ける。

「手術中」と書かれた赤いランプが光って、それがなんとも憎たらしい。

何か、忘れてる気がする。

ああ、そうだ。

私は哀ちゃんのカバンを自分の横に置いて、再び携帯を取り出す。と、これからかける相手の名前を見て、何故か私はどうしたようかと戸惑った。

彼に、言つべきか、言わないべきか。

「バカ」

言わなきゃいけないに決まってる。

だって、哀ちゃんのこと、私より、じゃなくて、私と同じくらい好きなんだもんね。

『もしもし』

『歩美ちゃん？どうした？みんな心配してるけど――』

コナン君。

09 . x x (後書き)

タイトルがいい加減で申しわけありません>(――)<
歩美ちゃんの動転した様子と哀ちゃんの様子を一気に表そうと思っ
たらこうなった次第ですorz

ああ、文才が欲しい。次回以降もよろしく願います。
次は少し時間がかかるかもしれません。

10・存在

歩美から突然連絡が来て、授業中だったが後ろで教師が叫ぶ声が聞こえたても3人夢中で走り病院に着くと、目を真っ赤にした歩美が何も言わずに俺たちを見た。
まだ終わっていないようだ。
口を開こうとした歩美を、光彦が慌ててベンチに座らせる。

「わ．．．たしが．．．いけないの．．．」

途切れ途切れに歩美は言葉を発した。
違う、違う。

「違うんです、歩美ちゃん。歩美ちゃんのせいじゃありません」

「――俺のせいなんだ」

へ？と真っ赤にした大きな目を、歩美はこちらに向けてきた。

「我慢できなかった」

「．．．コナンの奴灰原を」

元太が自分の肩を抱きしめて、俺がしたことを説明する。
どうしてこうも自分は空回りするのだろうか。
昔からそうだった。

歩美は黙って聞いていたが、しばらくしてどうしてそんなことしたの、と飛びかかってきた。

「コナン君は哀ちゃんの気持ち知ってるよね・・・？知ってて、そんなことしたの？」

感情を押し殺した声で歩美が呟けば、光彦が慌てて歩美ちゃん、と優しく名前を呼んでなだめた。

「・・・ごめんね、知ってるよ、コナン君だって辛いこと。私にだって責任が無いわけじゃない」

歩美は自嘲するように笑った。
そしてでもね、と静かに呟いた。

「哀ちゃんね、大事な親友なの。失いたくないの・・・哀ちゃんに何かあったら——コナン君でも許さない」

そう彼女は言いきった。

今の自分はただの疫病神でしかない。
情けなくて、壁に手をついた。

「――博士？」

元太が誰ともなしに言うと、視線の先には息を切らした博士が居た。大きな腹が息をするたび上下する。

「あ、哀くんは・・・？」

「まだ出てこないんです」

光彦が両手で顔を覆いながら静かに言い放つ。

俺の元から走り去った後すぐ事故に遭った計算なら、もう3時間弱は経っている。

「・・・保護者として、哀くんのしたことは誇れるがのう・・・こんなことになってしまったら・・・」

博士が言っている意味が分からず、俺を含めた4人が頭に「？」を

浮かべて博士の顔を見る。

「．．．どういことだよ、博士」

向き直って、博士に尋ねる。

歩美がちらりと俺を見た気がした。

「．．．どういことって．．．哀くんが事故に遭ってしまったのは．．．」

「うちの子のせいなんです」

今度はなんだ、と声のした方を見ると30になったばかりくらいの女性と、その女性にしがみついて泣いている5歳くらいの女の子。

「あの．．．」

「この女の子が車道に飛び出してしまったらしくての、哀くんがこの女の子を．．．」

要するに、灰原はこの小さな女の子のために、自ら車道に飛び出し事故に遭ってしまったらしい。

アイツらしいと言えばそうなるし、かと言ってこの結果が良かったというわけではない。

「哀ちゃん優しいから．．．」

歩美はそう言って女の子に笑いかけた。

「怪我不い？」

「・・・うん」

「よかった」

見れば光彦と元太も言葉は無いものの、小さな女の子に微笑んでいた。

ああ、そうだ。

彼女はこうして愛されているのだ、みんなに。

そんな彼女を独占しようと思っていた自分が愚かだったのだ。

自分が居なくても、彼女はほら、こんなに。

情けなくて、悔しくて、今すぐにでもここから逃げ出してしまうた
いくらいだ。

その時、白い廊下を照らしていた赤い光が消えた。

「哀ちゃん！」

扉が開き、担架に乗せられた灰原に歩美と博士が駆け寄る。

「手術は成功しましたので、後は意識が戻れば大丈夫ですよ」

そう言った医師の顔を、歩美は輝いたような顔で見つめた。

「良かった、良かった・・・哀ちゃん」

大粒の涙を流す歩美を見て思った。

自分は何なのだろう、と。

もしかしたら、今、いや。

ずっと前から、灰原の中で俺の存在は小さくなっているのかもしれない。

歩美や光彦、元太とか、こんなにいい親友が居て。

それなのに自分は彼女を傷つけるだけで。

喜びに満ちた3人と博士の後ろ姿を、ただ呆然と見つめることしかできなかった。

10・存在（後書き）

どれだけ開けたんでしょう、丁度3カ月。

本当に申し訳ないです>m(_____)m< そもでもってこの更新が待ったかいがある！な話だったかどうかは別ですけども、とにかくたくさん「楽しみにしてる」という言葉を貰っていたのでなんとか早めに更新しようとは思ってたんですが・・・

次辺りはもっと急ぎましようかね・・・あ、あくまで予定は未定です、これ受け売り。

次回もよろしくお願いします。

過去話も一部おかしなところを微修正しました。

11・約束なんて

「じゃあ、わしは着替えを取ってくるとするかの」

博士の一言で、光彦が『じゃあ僕もそろそろ』と腰を上げ、『店番しなきゃ』と元太もそれに続いた。

しばらくは未だに意識が戻らない灰原を、歩美と二人なんとなく気まずい空気で見守っていたが、しばらくして歩美の携帯が鳴りそれが母親からのメールだということを彼女が確認すると、『じゃあ、私も』と歩美も帰り支度を始めた。

「コナン君、あと頼むね」

「・・・ああ、」

病室の重い扉を歩美が閉めたのを確認して、ほっと溜息をついた。息が詰まりそうだったのだ。

（絶対に許さない、か）

彼女はお互い認める灰原の大親友だ。

そんな彼女が言った言葉が、あながち嘘では無いなんて分かってる。

デジャヴ？

そんな気がした。

これじゃ、あの時と一緒だ。

あの時ほど、彼女は苦しい顔をしていないし、頭に包帯が巻かれて
いるくらいで、外傷だって大したことは無いのに。

小学3年の時だ。

「ねえ、知ってる？私は命なんか惜しくない」

ぐるぐると頭に巻かれた包帯が痛々しかったが、彼女はそれでも不気味な笑みを浮かべていた。

意識の戻らない彼女の脇で散々泣き散らした自分が馬鹿に思えるほどの、微笑みで。

こうなった理由はただ一つ。

彼女がジンに撃たれたのだ。組織の本部を追いつめ、『あの方』も自決し、最後に残ったジンが彼女を撃ち、自分もまた。

しかし、血まみれで倒れていた彼女は思わぬ行動に出たのだ。

「お前、何してんだっ！」

慌てて彼女の手にあつた何かをはたき落とす。しかし、遠のく意識の中でも彼女はそれを取ろうとしていた。目を凝らすとそれは・・・

「アポトキシン
APTX4869・・・お前っ」

「・・・死なせて」

そう言葉を絞り出すと、彼女は意識を失った。

建物はネットワーク設備や電話回線がすべて切断、電波の届かぬ山奥にある本部では携帯電話も役には立たなかった。

しかしながら、まだ息のある灰原を助けるためには、一刻も早く治療をする必要があつた。

FBI勢もほとんど全滅してしまった地獄絵図のようなこの場所で、博士が作ってくれた特殊回線の電話で博士にコンタクトを取り、彼女は素性を明かすことなく病院に運ばれたのだ。
なのに。

「お前」――

目を覚ました彼女は意気揚々と話しだした。

「・・・ジンは私を殺すことなんか出来ないって最初から分かった。あなたには言ってなかったけど、かつては一夜を明かすような仲だったもの。あれだけ血眼になって私を探していた彼も、ね。だから撃つてきたところで急所を外すだろうってことは容易に予測が出来たわ」

「死んでしまいたかったの。あなたは私が自分で命を絶とうなんて考えてると知ったら、きつと怒鳴りつけるか、手を出すかするでしょうし。だったらこれを利用しない手は無いって。撃たれたふりをして、APTXを飲めば、あの緊迫した状況下で失血死だろうと毒死だろうと分かるわけ無いと思ってね」

「組織のネットワーク設備や電話回線は私が全部壊したわ。携帯も繋がることも無い・・・上手くいくはずだったのにね――

――あなたに見つかった上に、博士がそんなものを作っていたなんて」
「解毒剤はデータがあれば極秘でどこかの製薬会社に頼めば作れるレベルのものよ。データもジョディ先生に渡しておいたしね」

彼女は一気に吐き出すように言うと、ため息をついた。

表情からは何も読み取れない。

呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

「．．．ざけんな」

「．．．」

「お前、自分を何だと思ってやがる」

ようやく自分が彼女に言うべき言葉が見つかったのだ。
それなのに。

「．．．だから嫌いなのよ」

「は？」

「あなたのこと。そうやって人命だの真実だの綺麗事並べて楽しいのかしら？ 大体、あなたが子供の姿になったのも、くだらない好奇心で動いたからじゃない」

「．．．んだとっ！？」

彼女が怪我をしていなかったら、きっと自分は手を出していたに違いない。

「言い過ぎたわ。ごめんなさい——でもね、他人の気持ちを理解したつもりになって真実を暴こうだなんて勘違いにも程があるわ」

解毒剤はちゃんと完成させるつもりだから、安心しなさい。

もう疲れたわ、出て行つて。

彼女はそれだけ言つと有無を言わず俺を病室から追い出した。

人を失うことの怖さも、全部彼女に思い知らされたような気がするのだ。

傍に大きな存在を失いかけて気付くだなんて。

愚かだ。

「
目、開けるよ」

彼女の頬に触れて呟いた。

誰も居ない病室で、自分の声は人工呼吸器を付けた灰原の一定の呼吸のリズムにかき消される。

「開けるって言ってんだろ」

彼女から手を離し、両手を膝の上で強く握った。

この程度の怪我で、目が覚めないことなどほぼ無いと言っていいだろう。

だけど、悔しいのだ。

彼女を、守ることなど出来なかった。

それは、たった一つの真実。

11・約束なんて（後書き）

ジンはどうしても絡めたいんです。途中の回想シーンは自分なりに考える展開です。ジンは哀ちゃんを殺すことは出来なくても、きつと原作設定で行くと哀ちゃん自身が自分で命を絶つのでは、と。

自分は哀ちゃん大腸菌（失礼、大好き なので、死なせはしないと決めてます↑過去に短編で死なせた奴

12・焦つちや駄目

「あら、江戸川君」

おにぎりを頬張りながら、哀はコナンを見て言った。
愉快に笑いながら歩美は博士と話をしている。

哀の意識が戻ったのだ。

「お前・・・」

「食べる？」

哀が差し出したのはちょこん、と少し形の崩れたおにぎり。

「私が作つたんだよ！」

満面の笑みで歩美はコナンを振り返ってそう言った。

緊張感のない空気に、コナンは思わず座り込みそうになる。

「もう、大丈夫なのか？」

「ええ、別に」

別についてお前

心の中でため息をついた。
もちろん、安堵のため息だ。

俺の涙返せ。

コナンは小さく呟いた。

「ほら、早く食べなさいよ」

せつかく歩美ちゃんを作ってくれたんだから

パジャマの袖からのぞく白く細い手を見て、コナンはほっとする。

しかし、コナンは不信感を抱いた。

自分の強引な行動で、最後に会った彼女は泣きはらしながら自分の元を去って行った。

なのになんだ。この何も無かったような態度。

まだ無視するとかの方がマシだった。

逆に白々しい感じで、コナンはひどく不安を覚える。

しばらく考えて、少し形の崩れたおにぎりを頬張って、脇の折りたたみ椅子に腰かけた。

その時、病室の引き戸をノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

応えたのはベッドの向こう側にいる博士だった。

少しは警戒しろよ、とコナンは思ったが、こんな時まで自分は事件を引き起こすような人間ではない。

「失礼します」

この声っ

「倉木君？」

どうして、コイツが。

貧乏ゆすり。

椅子をキコキコならしながら、コナンは充を睨んでいる。

「C組の代表で来ました」

大きな花束を抱えて、倉木充は博士と歩美、振り返ってコナンに会釈をした。

へえ、コイツが。

コイツにはとても灰原扱いきれねえよなあ。
大体コイツのどこが良いんだよ。

「ありがとう、わざわざ」

「すまんのう」

ただ感謝する博士と哀をよそに、状況を知っている歩美は充とコナンを同時に見比べた。

「灰原さん、具合大丈夫なんですか？」

「ええ、もう」

ああ、駄目だ。

歩美は直感して、コナンの制服の上着の袖を引っ張った。

「ちょっと表行こう、コナン君」

「お、おいっ」

「ゴメンね、私達ちよつと話があるから」

歩美は振り返って言うと、強引にコナンを引っ張り病室を後にした。

病院の中庭にある、三人がけにベンチに無理やりコナンを座らせ、歩美はそれに腰かけた。

「私ね、コナン君に話したいことたくさんある」

「・・・なんだよ」

「まずね、哀ちゃん大事にしなさいよ。確かに哀ちゃんは今倉木君のこと好きだっていうことが気に食わないの分かるけどさ」

「別にそんなこと思ってねえよ」

「じゃあなんで哀ちゃんのこと強引に抱きしめちゃったりしたの？
順番が逆でしょう？」

そこかよ。

「コナンは小さく声に出す。」

「あれは――」

「言い訳出来るの？」

「・・・出来ません」

ふう、と小さく歩美がため息をついて、沈黙の空気が流れた。

「分からなくないよ、コナン君の気持ちも」

「え？」

「気付いた時には遅かった、ってこと。でも焦っちゃ駄目だと思うなあ」

「――どういう意味？」

「本当は私も、コナン君と哀ちゃんがくっつけばいいのに、って思ってるから。倉木君には悪いけどね」

どうしていいか分からず、コナンは無言で首を数回振った。

「そっか」

「焦っちゃ駄目、か」

心地よい風が吹く。

12・焦つちや駄目（後書き）

歩美ちゃんいいなあ。こんなに良い子今居ないよ？
この小説のキーになる人物だなあ。

ところで、随分間開けたのでなんか矛盾が無いか心配。
危うくこれ最初哀ちゃんが「工藤君」言ってた^| ^| ;
なになが矛盾があつたら教えてくださいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3706n/>

regret

2011年10月7日03時49分発行